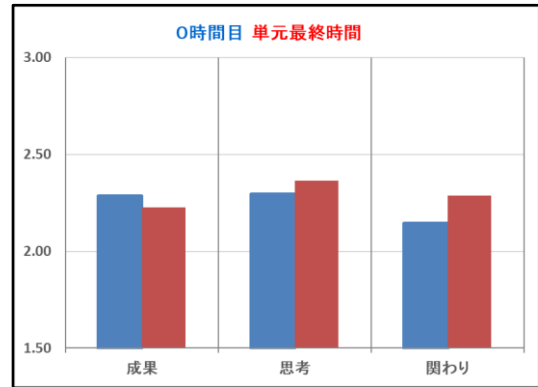
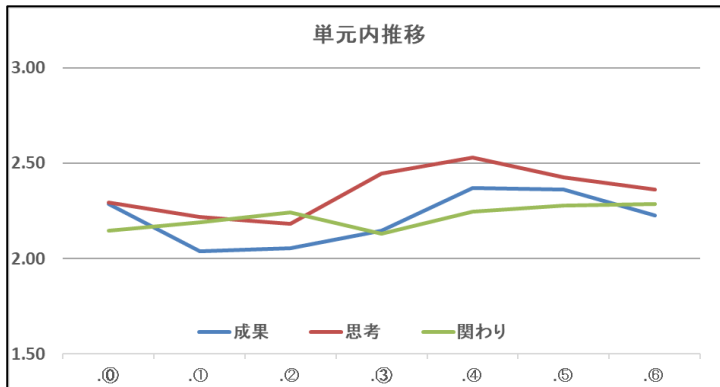


1 単元名 「風になる、軽くなる、自由になる」回って、回ろう！（器械運動・跳び箱運動）

2 児童の変容

(1) 情意面 （形成的授業評価をもとにした授業評価から） 男子15名 女子16名 計31名



- ・「成果」の数値はやや向上している。跳び越すことができた。台上で回ることができた。この変容が自信につながっている。「やればできる」という気持ちが芽生え、児童も自身の課題を解決するために思考しながら練習に取り組むことができていたことがうかがえる。
- ・「思考」の数値はやや向上している。「できるようになりたい」という気持ちをもとに、「どうすればよくなるのかということを考えながら学習を進めることができるようになってきている。一人一人めあてをしつかりと持つことができてきている。
- ・「関わり」の数値はやや向上している。自身の課題を見付けるために、グループの友達と見合いながら学習したことが数値につながっている。かなり積極的に教師が関わったが、教師と児童の関わりの数値がやや低かった。教師の言葉かけが、すぐに直接的に結果として表れなかったからではないかと推察している。

(2) 技能面

	①開脚跳び			②台上前転		
	できる	もう少し	できない	できる	もう少し	できない
単元前	10	10	11	0	10	21
単元後	21	10	0	2	29	0
	かかえこみ跳び			/		
	できる	もう少し	できない			
単元前	15	3	13			
単元後	15	3	13			

- ・単元前と比較して数値の上昇が見られる。
- ・体慣らしの運動を一つ一つ丁寧に取り組んだことが成果につながっている。
- ・全員開脚跳びで跳び箱を跳び越すことができた。全員台上前転の取り組みにおいて跳び箱上で回転することができた。
- ・台上前転の「できる」の数値は、器械運動審査会の合格数を記した。全員台上で前転することは、ほぼできているが、完成度は今一つである。具体的には、回転するときに頭が十分に入っていない。
- ・取り組む技が少ない。体慣らしの内容から、頭はね跳びに取り組む児童がいなかった。（できる数は0）かかえこみ跳びに取り組むこともできなかった。取り組む技を広げ発展させていくことにはまだ課題がある。

(3) 思考面

問 台上前転ができるようになるために、どのような練習や取り組みが必要だと思いますか（しましたか）。（複数可）	
単元前	単元後
・怖いという気持ちに勝つ。 ・何度も練習すればできる。 ・先生に鍛えてもらう。 ・あきらめない。 ・だらだらやらず、さっさと取り組む。 ・絶対に途中でやめない。 ・助走、強い踏切、ジャンプ、手のつきが大切。 ・二人組の馬跳びをたくさん練習する。 ・いろいろな跳び方を練習する。 ・もっと跳び箱運動や台上前転のことを知る。	・まっすぐに前転することが大切。 ・すぐに頭をつけてしまうと背中を打つ。着地でおしりをつくようになってしまう。 ・かえるの足うちや倒立など、腰を上げる運動をした方がよい。 ・大きな前転、6の字前転などの練習をした方がよい。 ・跳び前転と似ている。マットも練習した方がよい。 ・友達のよい動きをしっかりと見る。

- ・授業前は、精神論・根性論のような記述が多かったが、事実や数字に基づいた客観的、論理的な考え方が出てきた。
- ・「見る一見られている」というよい緊張感の中で学習を進めることができた。さらに友達との関りを増やすことが期待できる。
- ・自分に合った練習方法や場を選択して練習することにより、技のポイントを知ることができた。
- ・自己の課題解決のために必要なことを意識したり、選んだり、考えたりしながら学習する場面をつくっていくことが期待できる。こ

3 成果と課題

中学年のめざす姿

自分の課題を見つけたり、課題解決に取り組む内容を選んだりする中で、知識や考えたこと、気付いたことを伝えあうことができる児童。

【成果】

- ・可能な限り運動量を多くした。
- ・体ならしの運動では、補助倒立や頭倒立（三点倒立）等のマット運動の技を取り入れた。腰の位置が頭より上に来る感覚を味わわせることができた。
- ・体慣らしの運動で、二人組の馬跳び、さらに二人を跳び越す三人組の馬跳びに取り組ませた。跳び越す感覚や着手の大切さを体感することができた。またグループによる取り組みを行うことは、知識や考えたこと、気付いたことを伝えあう機会にもなった。
- ・スモールステップ表を活用したことで、自分の実態や課題が把握しやすくなった。どんな練習をすればよいのか知ることができた。また、教師が児童の実態をつかむために意識していく必要がある。
- ・思考面の記述で、「精神論、根性論」という言葉を使用した。が、気持ちの部分で「できる」「できない」が分かれている児童が多かった。「自分にはできっこない」「やりたくない」そういう気持ちを払拭するために、日常生活や学級経営とも結び付けて学びを深めていく必要がある。できなかったのではなくやらなかっただけということに気が付くことができた。
- ・全員開脚跳びで跳び箱を跳び越すことができた。全員台上前転の取り組みにおいて跳び箱上で回転することができた。ただし、器械運動審査会においては完成度まで求めているため、合格率が低かった。

【課題】

- ・個人的な感想も含むが、学校全体の体育授業を見て運動量が少ないと感じる。学校全体で改善が必要である。
- ・スモールステップ表の活用も一つの方法だが、ともすると一つの領域につき年間一つの技にしか取り組まない児童が多く出ている。「技を広げると教師が見れない」となっているなら課題は児童というより教師の側にある。
- ・授業における技の扱いがいわゆる全体共通課題で単一の技の達成に主眼が置かれている。本校で実施している器械運動審査会のための授業づくりになっていることがある。技を組み合わせる、発展させるという意識が低い。当然、技能の向上も限られたものになる。